

NO. 152

発行日 : 2025年1月1日

連絡先

國分富夫 (会長)

住所

〒976-0052

福島県相馬市黒木字迎畑 91-12

電話 090 (2364) 3613

メール kokubunpisu@gmail.com

事務局

鈴木宏孝 090-2909-6133 (浪江)

関根憲一 090-4889-3726 (富岡)

板倉好幸 090-9534-5657 (南相馬)

原発事故被害者 相双の会

窮月も早々と終わりをつげ2025年の夜明けを迎えました。

私は元旦から能登半島の大地震に見舞われ正月どころではありませんでした。誰もが日本は災害大国であることを重く感じた正月であったと思います。

昨年は東日本大震災(3・11)、その24時間後の福島第一原発水素爆発事故を生々しく思い浮かべていた正月でした。もし能登半島に位置する珠洲市に原発が建設稼働していたら被害は福島第一原発事故よりはるかに大きかったと思われます。震度7は私たちには記憶がありませんが、原発が停止状態であっても、隆起が4mとなればどんな原発であろうが、真っ二つに割れても不思議ではないとおもいます。被害は近隣県どころか中部地方、近畿地方までもおよんだと予測されます。珠洲市のみなさんが体を張って建設させなかったことに感謝です。

2024.12.4 仙台高裁第11回裁判期日口頭弁論期日 原告意見陳述 原告 馬場 靖子

馬場靖子と申します。1941年生まれ。満83歳です。

2011年の原発事故で、浪江町津島から大玉村に避難し、今に至っております。

若いころは小学校で教職に就いておりました。津島小学校を始め、県下の小学校に勤務しました。

2001年に教職を退職。

その後、友人に誘われて、趣味として写真を始めました。

趣味だった写真を「被災地の記録」として残そうと転換させたもの、それは荒れ果てた、衝撃的な故郷の姿でした。

避難してからは、毎日流れる被災地のテレビ

ニュースにくぎ付けでした。特に、私が住んで居た赤字木地区柵平が高線量である事が分かってからは不安な毎日を送っていました。原発事故直後の2011年5月に津島を訪れてからは、2年半のあいだ足が遠のいていました。

2013年9月、夫が被災地を案内することになり、私もついて行きました。たった2年半でしたが、家の周りにはもうすでに雑草に囲まれ、家の中も、人や動物が侵入したあとがあり、避難時の様子とは明らかに違っていました。

津島は、特に赤字木柵平周辺は、線量が高く、しかも、どこがどれくらい高いか分からない不安もありました。それでも、写真を撮らねばという思いから通い続けました。写真は楽しむた

めだけでなく、事実を記録する、後世に残す役割がある事に気付かされました。

放射線量ごとに色分けした地図を見ると我が家のあたりは真っ赤です。年間追加被爆 50 ミリシーベルトを超えているのです。想像もできない現実、そのことがどんなに不安を掻き立てるかお判りいただけるでしょうか。

私たちを不安に陥れ苦しめている、原発を進めてきた国と東電に怒りを感じていたので、「これは、無かった事には出来ない」と思っていました。

行く度に家の周りには草が、田圃にはヤナギが生い茂り、荒れが酷くなっていきました。それは家の中も同じで、人や動物が入り込み荒らして行った跡が明らかになってきました。その様子を見る度に、私は、「ここは自分のふるさと。つい数年前まで家族と住んで居た所だよ！」ということはどう表現したらよいか悩みました。いつかは無くなり、忘れられてしまうかもしれないこの景色を、ここで自分が体験したことの一部でもいいから、残して置けたらと思いました。

津島の自宅へ帰るとき、国道 459 号線で二本松市田沢地区周辺を通って行くようになりました。そのあたりはかつての津島に良く似た、早苗が波打つ田んぼがあり、とても穏やかな気持ちにしてくれます。そんな時、ふと、かつての津島を思い出します。“田んぼには苗が植えられて緑いっぱいだった！”。そう思いました。そんな時、津島に思いを寄せて活動している方々から、「事故前の写真は無いですか？」と声を掛けられ、データの掘り起こしを始めました。

ある日、私は事故前の写真を探しに、津島の自宅の物置の 2 階に行ってみました。あちこちさがしていたら、小さな箱の中にあった紫色のワンピースを見つけました。「アラッこんなどころに！」。若いときに、わたしのお気に

入りだった、おしゃれ着です。広げてみました。もう着ることはできないけれど、思わず、防護服の上から、胸に当ててみました。懐かしさが込み上げてきました。

私はその後も事故前の写真を探しました。そこ



懐かしきワンピースを胸に当てる

には津島の方たちの、優しい笑顔や元気な姿・逞しく働く様子がたくさんありました。

「写真集」の表紙の写真もその中の一枚です。

この日は秋晴れの作業日和でした。自然乾燥するための（後ろに見える）はせ掛け（稲架（はさ）掛（が）け）には、隣組の人や夫の友人が手伝いに来てくれました。激しい農作業後の一服の時間は疲れた体を休め、雑談を交わしながら



農作業後の一服

お茶を飲む、楽しみのひと時です。わたしも皆さんと一緒におやつを食べながら楽しい話に混ざります。

この写真には、豊かな実りを喜び合う、人と人との繋がりや穏やかな農村の暮らしがありました。こういう光景が無くなってしまふことなど考えもしませんでした。幸せな時間だったと、今、思います。

後ろに見える田んぼには今、大きなヤナギの木が生い茂り、山林となり以前の風景を想像すら出来ません。

もう二度とこういう光景は見る事が出来ない大切な一枚です。

このような津島を何とか残すことは出来ないかと日々考えていた時、知人に「写真集」にすることを提案され、一年余りを掛けて作ることが出来ました。

できあがった「写真集」は、「あの日あ のとき 古里のアルバム 私たちの浪江町・津島」と名付けました。ページをめくる度に、幸せを感じています。まるで、懐かしい方々にお会いしているような気がするからです。もし、これを見て頂いたとき、今は離ればなれになってしまっているけど、「この人、げんきかなあ」と思いを馳せて頂けたらいいなあと思いました。

そして、忘れてはならないのは、原発事故で避難して以来、津島に帰りたいと願いつつ、生きる希望を奪われ、古里での一生を全うできなかった方たちが沢山おられることです。「写真集」の中だけでも 17 名もいらっしやいます！ この「写真集」にはそのような方たちが生き生きと暮らしておられた姿もあり、その在りし日に想いを巡らせて頂きたいと思います。

また、いつか先祖の家に、家跡に立ち寄ってくれるかも知れない子孫たちにも、津島の人たちの穏やかな暮らしや美し

かった自然の姿が伝わればいいなと思います。

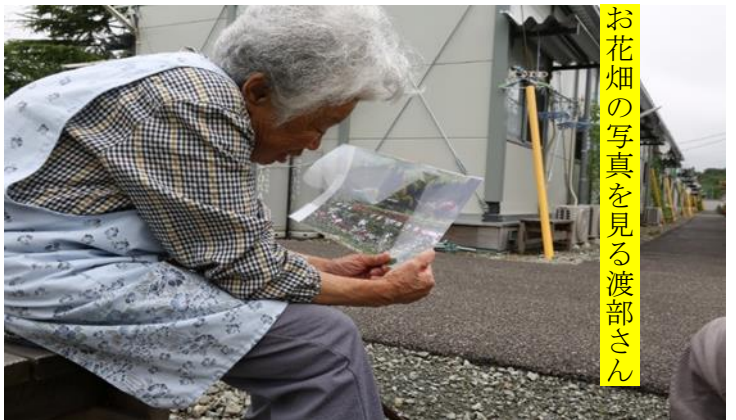
「おじいさん、おばあさんが暮らしていた津島は結構いいとこだったんだね！」と。

でも、私が写真集に載せたかったのはそれだけではありません。原発事故という理不尽な、耐えがたい境遇に置かれた被災者が、荒廃する自宅を見、愕然とする姿や、離れ離れにされながらも、人との繋がりや生き甲斐を見つけ逞しく生きている姿も、一緒に観てほしいという願いもあります。



「写真集」26 頁の写真です。原発事故直後の 2011 年 5 月、津島の自宅に帰って、避難先に戻る途中に撮影しました。津島には人影がなくなっていました。だれもこの美しい景色をみる人がいない。でも、花は季節がくると見事に咲きます。思わず車を止めて撮影しました。水境の渡部さんの畑です。

渡部さんご夫妻が安達仮設住宅にいと知って、この写真を持ってうかがい、差し上げまし



た。

仮設住宅の前で懐かしそうに写真に見入っている渡部さん姿の写真です。

わたしたち夫婦は、今年一月に自宅を解体しました。このまま何年も放置しておいたら朽ちてしまう。誰だって住み慣れた家が朽ちていく様子は見たくありません。喜びも苦しみも愛も希望も詰まった我が家です。それは、苦渋の決断でした。

解体の日、私たちは津島の自宅に行きました。その日は雨で、自宅の中はすでに空っぽになり、壊すだけの姿で残されていました。夫は辛そうに周りを見回しながら、「どこも傷んでいないのになあ」とぼつりとつぶやきました。



最後の姿を写真に収めようと待っていると、重機がゴーツゴーツと動き始め屋根に迫っていききました。ゴーツ、ガリガリガリッ、メリメリメリ、と音をたて屋根を引きはがしていきます。私は、レンズ越しに見つめ続けていました。

「何故!」「何故!」、生きた証が無残にも切り裂かれ、耐えるしかない無情の時間でした。私は夫の無念さを思うと辛くなりますが、震える感情を抑え、その表情も残そうとカメラを向け

ました。

こんな形で壊さざるを得ないのは本当に悔しいことでした。「原発事故さえなければ……」。虚しさと悔しさ、折れそうな心。恨みなのか、悲しみなのか、心の整理がつきません。そこまで追いやったものは何なのでしょう。

1か月後自宅跡がどうなっているか知りたくて、またカメラを持っていきました。牛舎も物置も自宅も無く、がらんとした敷地だけが目に入りました。

「本当に何にもなくなってしまったんだなあ」なんにも無くなった跡地に立つのは辛かったです。以前自宅を解体した友人が私に言いました。「家が無くなっちゃうなんてさびしどー」と。今その気持ちが本当によく解りました。

「家も無くなってしまったら、津島を古里と思えなくなってしまうのだろうか。そうしたらどこに心を寄せればいいのか」。そんな思いがふと湧いてきました。

そんな時この「写真集」が出来てきました。ページをめくるたびに、私は心が温くなるのを感じました。

私たちは、人間は原発とは共存できないということを骨身に染みて知りました。被災地の外の方々にも、原発事故の恐ろしさを感じてほしいと思います。

「写真集」に込めた思いを帯封に書きました。読んでみます。

～古里に心を寄せて…ふたつの古里…

豊かな自然。穏やかな笑顔。あたたかいコミュニティ。生きることに一生懸命な姿。以前は、この様な姿が津島には沢山ありました。

でもそれが、あっという間の原発事故で失われ、住むことが許されず、みんな散り散りになってしまいました。

原発事故から13年！

この13年間は、私にとって古里の荒廃を見続けてきた年月でした。行くたびに変わり果てている古里をみると、悲しみと怒りを抑えることが出来ません。二度と誰にも経験させてはいけないこの現実を、ひとりでも多くの人に知ってほしい。帰りたくても帰れない地域があることを知ってほしい。「復興」という掛け声から取り残された人々がいることを知ってほしい。その気持ちに背中を押され、シャッターを切ってきました。

家々は荒れ果てたり壊されたり、昔の面影は全くなくなりました。辛い現実ですが、せめて

元気なうちは、その変わりゆく姿を記録に留めておきたい、と改めて思います。そして、昔、津島にはこんな幸せな姿があったんですよ！と、記憶にしかないその姿を、せめて写真でみて頂けたらと思います。

いま思うことは、原発事故前の津島も事故後の今の津島も、どちらも自分の古里であるという事です。私の、私たちの二つのふるさとです。**最後に、裁判長に申し上げたいことがあります。失われた「ふるさと津島」がもう一度、蘇るように、国・東電の責任をはっきりと断罪し、復興への道をお示し下さい。**

今年もよろしくお願ひします 原発事故被害者相双の会

放射能から逃げ回る14年でした

東京電力福島第一原子力発電所事故のあの日、津波におそわれ助けを求めている命を救助できないまま、町を出なくてはならなかった消防団員がいました。連絡のつかない家族が無事に避難できているよう祈りながら、住民の避難誘導をしていた役場職員がいました。

避難中、「福島から来たから」という理由だけでトイレを借りることを拒まれた人もいました。次々にやってくる避難者への炊き出しを手伝っていた子どもたちの上にも、水や食料を求めてスーパーに並んだお母さんの腕の中で笑っていた赤ちゃんの上にも、放射能が降り注ぎました。母乳から、浄水処理場から、下水処理場から、セシウムが検出され、農家の人は、丹精込めてつくった作物の出荷を規制され、春本番の作付けを諦めました。

あの日から間もなく14年、その間に原発の再稼働が始まり、「脱炭素社会」への移行)の名の下に、「原発最大限利用」の関連法が国会を通

過しました。

また、事故サイトに溜まり続ける「ALPS 処理汚染水」の海洋放出も強行開始されました。そして、これらの動きにお墨付きを与える役割を果たしたのが、2022年6月17日の最高裁判決でした。この判決は、国が規制権限を行使したとしても福島原発事故は避けられなかった、だから「国に責任はない」というものです。しかし、過去の責任の否定は、将来の義務の放棄を意味します。いま、この最高裁判決のもとで、「国策民営」の原発再推進へと大きく舵が切られています。あの過酷な原発事故の反省と教訓は、どこに活かされているのか？

『原子力緊急事態宣言』について

事故から満14年になるというのに、『原子力緊急事態宣言』は解除されていない。原子力災害対策特別措置法では「原子力災害の拡大の防止を図るための応急の対策を実施する必要が

なくなったと認めるとき」に、首相が緊急事態宣言を解除するとある。

と、いう事は応急の対策がまだまだ時間が必要であるということにつながります。解除できない状況のなかで、老朽原発を再稼働し、寿命が尽きても稼働年数を延長し、新增設も図るという矛盾している。

つまりは電力資本、それにかかわる資本が儲かれば良い事で、国民の命と健康など一欠けらも考えにないということにつながります。

原子炉建屋内の現実

2、3号機の原子炉格納容器の上蓋（うわぶた）が、デブリ（溶け落ちた核燃料）に劣らない極めて高濃度の放射能で汚染されたまま、手もつけられないありさまである。上蓋は直径約1.2mの分厚いコンクリート製の三枚重ねで、総重量約465トンもあり、動かすのも容易ではない。2号機の上蓋の放射性セシウムの濃度は、少なくとも2京～4京ベクレル（京は兆の一万倍）で事故時に大気に放出された量の2倍程度と推計される。2年や3年たとうとも、20年や30年たとうとも決定的に改善されるわけでもない。3号機も同様である。

1、2、3号機とも原子炉圧力容器の底部はすっかり破損し、格納容器の底部も溶けてしまっ、見る影もない。

それぞれの炉のデブリがどのような状態でどこにあるのかさえ、いまだに把握できない。小さいカメラを工夫し、細い通路を作って送り込んでみても、放射線レベルが極めて高い中、すぐに装置は故障してしまっ、拡散したデブリを見ることも写し撮ることもできない。

汚染水の海洋放出

自民党政権に支持されて東電は大量汚染水の海洋放出処分を強行開始した。全魚連や福島県民や国民や近隣諸国民の意志を踏みにじって。

「規制値以下に希釈して放水するから問題ない」とするが、何倍に薄めようとも、「処理水」

に含まれるトリチウムや、まだ残存する放射性物質ストロンチウムやセシウム等々の絶対量（総量）は少しも減るわけではない。

第一原発のすぐ近くには広大な空き地を残す第二原発がある。ここにタンクを造り、配管輸送して放射能が十分に減衰するまで貯蔵することは容易である。セメント固化（モルタル固化）貯蔵も可能である。

この明快な解決策が実現されないのは、わずかな所要資金を、東電が利潤のためではなく漁民、国民のために使うことを惜しむからである。そればかりか東電はここに新たな原発を造るために空き地としておきたいものと推察される。汚染水をろ過するための多核種除去設備（ALPS）からは高濃度の放射性物質の汚泥が生まれる。これを保管する容器（HIC）はすでに1万基に迫る。現状の運用のままでは、置き場が満杯になり、ALPSによる汚染水処理ができなくなる。これらHICの保管にも、第二原発の敷地を活用すべきである。

汚染土の中間貯蔵施設

第一原発の周辺には広大な「中間貯蔵施設」が設置され、各地から汚染土などの土のう袋が運ばれている。政府は30年（2045年3月）以内に、「県外最終処分場」を決めると約束したものの、候補地探しも始まっていないし、引き受けるところが現れるはずもない。

各地の道路建設や埋め立てなどに使用させるつもりらしい。そのために環境省が乗り出して、埼玉県所沢市（環境調査研修所）や茨城県つくば市（国立環境研究所）や新宿御苑に持ち込んで突破口にしたいらしい。

福島県内であれ県外であれ、そのようなことが許されてよいはずもない。

「中間貯蔵施設」は東電が自らの土地・施設として買収し、せつかく集めた汚染土をどこにも拡散させるべきではない。

